

駱 耕漠「資本論」第一章第四節の

要点と疑問についての試論

——『經濟研究』誌 一九六三年第五期

松 野 昭 二 訳

『資本論』第一卷第一章はきわめて難解であるが、その第四節はとくに難解である。私は、この第四節を理解するためには、まず、第一章の論理的構成を把握しておくことが肝要

であると考ええる。すなわち、前の三節は価値が「社会的な自然諸属性」というべきものではなくて、労働にほかならないことを真正面から論証している。第四節は一步すすん

で、生産物に凝結している労働がなぜ価値として現象し、自然諸属性として現象するかを解明している。同時に、第四節の各文節の間の関係についても一定の把握がなければならぬ。マルクスにあつては、叙述はたんなる形式の問題ではなく思考の内容に規制されるものであるから、各文節の構成に

留意することも理解を容易にする。中国語訳本では第四節は二〇文節に分かれているが、四つの文段に分けうると、私は考えている。

第一文段は第一文節である。ここでは問題が提起されており、商品の物神的性格が商品の価値にあることを指摘している。

第二文段は第二文節から第一〇文節までであつて、この節の中心をなしている。ここでは、商品の物神的性格の内容が説かれ、物神的性格がどのようにして形成されるかが説明されている。

第三文段は第一一文節からはじまるが、ここでは、先行し

た叙述をうけついで、商品の物神的性格がある社会的な生産方法にとって妥当な、また客観的な思考形態であるにすぎず、ひとたびそのような社会からきりはなされると、労働生産物をおおっていたすべての神秘的な魔法（物神的性格）がただちに消滅すると、総括している。これにつづく第一二文節から第一五文節までは、四つの例をあげて、資本主義社会以外の社会ではなぜ商品の物神化現象が存在しないかを説明している。

第四文節は第一六文節から第二〇文節であって、ここでは、ふたたび商品生産者の社会で商品の物神思想が必然であり、消滅しきれないものであることを論じたあとで、第一七文節以下ではブルジョア的古典経済学や俗流経済学の価値論にそれぞれ批判を加えている。

この小論では第一文節と第二文節を中心にして論ずることにした。

- (1) 英訳本ではやはり二〇文節に分かれているが、若干の相違がある。一つは中国語訳本の第六・七文節が一つの文節となっているが、これはさして問題ではない。二つは中国語訳本の第一六文節が二つに分けられているが、これは一つの文節としておくべきであろう。（なお、日本語訳本『資本論』

上長谷部訳、青木文庫の文節区切りは中国語訳本と一致している—松野）

一 商品の物神的性格とは 価値の物神的性格である

第四節第一文節の冒頭で、マルクスは「商品は、一見したところには自明で平凡な物のように見える。商品を分析してみると、それは、形而上学的な繊細さと神学的な意地悪さに充ちた、きわめて奇妙な物であることが分かる」（二七〇頁）とのべている。マルクスが「商品を分析する」といっているのは、第一章の前の三節をさしている。ところで、このさい明白にすべきことは、前の三節で商品の使用価値と価値を分析して、価値が商品に凝結した人間労働であることを指摘し、また、交換価値がある商品と他の商品がそれぞれにふくんでいる労働の比例であることを指摘したあとで、あらためて、「商品を分析してみると、それがきわめて奇妙なものであることが分かる」とのべているのは、どうしてなのかという点である。これは前後の不連続ではないのであろうかという疑問が生じる。だが、この疑問は読者が前の三節で行なわれた分析の結論にのみ目をうばわれて、その分析が

ある一定の客観的存在を対象としたものであることを忘れさせたことに根ざしている。マルクスが第一章第一節の冒頭において、かれの研究が資本主義社会の富の原基形態としての商品の分析をもってはじまると、のべている点に留意しなければならぬ。そのなかでも第一の問題は「人は、かれが何も知らない時でさえ、商品がある共通の価値形態——貨幣形態をもっていることを知っている」という点にある。しかし、このことは人びとに商品の価格の背後に「価値」とよばれるものが存在することを暗示するにすぎないのである。

そして、かれらは、その価値が一体なことであり、また金属貨幣がなぜそのような魔法をもつのであるかについては、何ごとも知らないばかりでなく、生産物が「価値」というこの自然諸属性をもち、金や銀という生産物も貨幣たりうる先天的属性をもつのであると思ひこんでいるのである。ところが、商品の価値をこうしたものとしてとらえることは、商品生産者たちの社会ではきわめて一般的な、固い観念とさえなっている。それ故に、『資本論』第一章の前の三節において、マルクスはくりかえして、商品の価値が人間労働の特殊な表現であることを指摘したあとで、商品——価値がその本質を

現象するなかで、マルクスがいうごとく「形而上学的な繊細さと神学的な意地悪きに充ちた」ものとなる。つまり、価値が人間労働であるにもかかわらず、現象的には生産物の自然諸属性としてよく現象すると指摘したのである。では、なぜそうなるのか。これこそが第四節で分析される主題なのである。したがって、マルクスはこの節のはじめで先行する叙述をうけてさきにしめた文章を論理的に記述したのである。

これにつづいて、マルクスはつぎのようにのべている。すなわち、「それが使用価値であるかぎりでは、その諸属性によつて人間の諸欲望を充たすという観点のもとでそれを考察しても、あるいは、人間の労働の生産物として初めてかかる諸属性を受取るという観点のもとでそれを考察しても、それには何ら神秘的なところはない。人間がその活動によつて、自然的資料の諸形態を人間に有用なように変更するということは、感覚的に明白である。たとえば、木材で机を作れば、木材の形態は変更される。にも拘らず、机は依然として木材であり、ありふれた感性的な物である」。つまり、「商品の神秘性はその使用価値に根ざすものではない。「だが、それが

商品として登場するや否や、それは、感性的で超感性的な物に転化する。それは、その足で床に立つばかりでなく、他のすべての商品に対しては、頭で立ち、そしてその木材の頭から、机がひとり踊り出すという場合よりもはるかに奇妙な幻想を展開する」(ともに一七〇頁、傍点は引用者)。このくだりは、商品の神秘性が価値に根ざしていることを明白に示している。だから、私は商品の物神化は価値の物神化であると捉えるのである。

マルクスは第一章第三節において、亜麻布生産の織物労働と上衣生産の裁縫労働という「両者は、人間的労働という一般的属性をもっており、したがってまた、一応のばあい、たとえば価値生産のばあいには、この見地のもとでのみ問題となりうる。およそこうしたことは、何ら神秘的なことではない」(二五〇頁)とのべている。私は、この文章はマルクスがのべたところの商品が「その足で床に立つ」ということ、つまり労働がおおわれまたは逆立ちして自然諸属性として立ちあらわれまいということを注解するものだ、と考えている。この叙述につづいて、マルクスは「ところが商品の価値表現においては、事態がねじ歪められる」(二五〇頁)、つまり神

秘的なものになるとのべている。私は、この文章はマルクスがさきにのべた「それは、……他のすべての商品に対しては頭で立ち」、つまり労働がおおわれて、人びとによって商品(価値の実体)が社会的自然諸属性として捉えられること、そしてこのことが机がひとり踊り出すという場合よりもはるかに奇妙であることを、注解しているものであると、考えている。

このように、第一文段は第四節で分析しようとする問題を提起しているのである。「頭で立つ」とはなぜこのような意味を指すのかは、第三文節を読みとるなかで明白になるであろう。

二 商品の物神化は労働の一般的内容から生まれるものではない(抽象的労働の問題にふれて)

生産物が商品となるや否や、なぜそれが物神的性質をもつか、それがどこから生ずるのかという問題について、マルクスは第四節の第二文節と第三文節で二つの面から説明している。かれはまずつぎのようにのべている。すなわち、

「商品の神秘的性格は、商品の使用価値から生ずるので

はない。それはまた、価値諸規定の内容から生ずるのではない。ただし、第一に、有用的諸労働または生産的諸活動がいかに相異なつていようと、それらは人間的有機体の諸機能であるということ、および、かかる機能はいずれも、その内容や形式がどうあろうとも、本質的には人間の頭脳・神経・筋肉・感官・などの支出であるということ、は、一の生理学的真理である。第二に、価値の大いさの規定の基礎をなすもの、すなわち、右の支出の時間的継続、または労働の量についていえば、この量は、感覺的にも、労働の質から区別されるものである。どんな状態のもとでも、人間は、——発展諸段階の相違するにつれて同じ度合にはなかつたが、——生活手段の生産に要費する労働時間に関心をもたねばならなかつた。最後に、人々が何らかの様式で相互のために労働しあうや否や、彼等の労働もまた、一つの社会的形態を受けとるのである」(一七一頁、傍点は引用者)。

マルクスはすでに第一文段において、商品の神秘性がその使用価値にもとづくのではなくて、その価値に根ざすものであることを明らかにしたが、この叙述では、商品の神秘性が

その価値にもとづくものではあるけれども、価値を決定づける要素——労働そのものから生ずるものではないことを、この要素——労働そのものが超感性的なものではなく感性的なものであるということにもとづいて、明らかにしている。マルクスが三つの理由をあげていることは、いうまでもなく明らかであるが、ここでは抽象的労働と関連する問題に限ってのべることにしてしよう。抽象的労働について、今日、二つの理解が一般的に存在するが、私にはそのいずれもが誤っていると思える。一つの理解は、抽象的労働を商品経済に特有な範疇であるとす。もう一つは商品の神秘性または超感性的性格を商品価値の実体としての労働にもとめ、それが具体的労働ではなくて抽象的労働であつて捉ええないものであるとする理解である。まず、第二の理解を反駁することからはじめよう。

『資本論』第一章の前の三節において、マルクスが商品の価値を分析し労働に論及した時、いくども説明を加えている。マルクスはつぎのようにのべている。労働諸生産物から使用対象の属性をとり去つたあとにのこされるものは「幻のような同じ対象性に他ならず、無区別な人間的労働の・すなわちその支出の形態に係わりのない人間的労働力の支出の・単な

る凝結に他ならない」(一一九頁)。また、「諸商品の価値対象性はつかまえないところがなく、クイックリー夫人と異なっている。……個々の一商品をどんなにひねくりまわして見ても、それは依然として、価値物としては扱えられないものである」(二三三頁)。人びとはこの二つの叙述をどのように理解しているのだろうか。今日、多くの人びとは、商品の価値が「扱えられない」「幻」のようであるのはその実体である労働が具体的労働ではなくて抽象的な人間労働、社会的平均的必要労働であるためであるとみなしている。だが、このような理解こそがまったくの誤りであり、また一部の人が「価値」範疇と「労働」または「抽象的労働」、「社会的必要労働」という範疇とをひとからげにしてしまう原因の一つになっている、と私は考える。彼らはマルクスのこの二つの叙述がエンゲルスのべた中世農民、手工業者の間の相互の生産物交換という事実にもとづき、また、マルクスのいう「商品の神秘性は価値諸規定の内容から生ずるものではない」という把握にもとづいている点を見落しているのである。第二の立脚点についてのべてみよう。

宇宙の一切の事物はすべて具体性と抽象性という二重性を

帯びており、抽象性は具体性の中に宿っている。ある種の自然物について、われわれは科学実験室においてそれらの具体的な存在、具体的な形態のなかの非本質的なものを取り除いて、それらの抽象的な本質的な存在について分析または実験を行なう能力をもっている。たとえば、水について、このような実験を行なうことによってその抽象的な質——H₂Oを観察しうるのである。しかし、社会的な存在、たとえば労働について、具体的労働のなかに宿る同一の抽象的な質を直接にとりだして、手でふれたり目でみることはできない。ただ労働実践によって、各種の労働の軽重難易についての感覚によって、人間に特有な思考抽象力を運用して考察し測定しうるにすぎない。ところで、こうした対比の視点からすれば、H₂O——抽象的な水はやはりさまざまな具体的に存在する水と同じように感覚しうるものであるが、抽象的労働は具体的労働とは異って超感性的なものである。しかしながら、マルクスは対比の視点にたつのではなくて、概念(含意)によって商品の価値(労働がその実体である)の超感性的性格を論述しているのである。なぜならば、マルクスはさきにあげた二つの叙述のなかですでに価値規定としての労働そのもの

が、第一に、生理学的真理であり、その内容と形式の如何を問わず、それらが本質的に人間の頭脳・神経・筋肉等の支出であるのとらえ、第二に、価値量を規定する労働量はかれしんが「この量は感覚的にも労働の質から区別されるものである」とのべているように、労働の質と同様に、感覚しうるものであるとらえているからである。例をあげて私の考えを明示する助けにしよう。たとえば、社会主義国営の生産企業ではさまざまな労働を測定しうる換算率があつて、労働に対する報酬を支払うための尺度となつてゐる。一つの生産部門、たとえば紡織部門では、一定量の糸を生産するに際して全国的に平均的な綿花要費ノルマと労働時間ノルマを測定することが可能であり、したがつて一定量の糸の全平均的な労働要費を知ることができる。また農村の人民公社におけるさまざまな具体的労働はいずれも換算されて他のものと比較しうる労働工分(労働報酬の基準)として記録され、分配の尺度となつてゐる。こうしたことは、労働実践によつて、さまざまな労働の軽重難易についての感覚によつて、思考を経過してもたらされた結論なのである。社会的過程としてのべるならば、それらの個別的労働の社会的必要労働への換算また

は転化は、社会(国家、公社)が生産実践を評量し評価することによつて直接に統一的になしとげられるのであつて、それぞれが生産者が私的にその生産物を他のある種の共通の生産物(経済学的には貨幣とよばれる)と互いに交換する比例によつて間接的・迂回的になしとげられるのではない。このような評価・換算は中国の現段階ではまだ精密なものとはなりえていないけれども、基本的には抽象的な社会的必要労働の実態を反映したものであつて、化学者が水を実験し分解してえた結論と同様に正確なものだといつてさしつかえない。だから、マルクスは価値量規定の基礎としての労働量は労働の質と同様に感覚できるものであつて、超感性的なものではないとのべているのである。もはやあきらかなとおり、抽象的労働についての誤つた理解は、「価値の实体としての労働は幻のような対象性である」「諸商品の価値対象性はつかまへどころがない」という問題を、抽象的労働そのものの直接に眼にしえず手でふれえない性質にもつくと天真らんまんに理解しさつたことに由来してゐるのである。

(2) 駱耕漢『貨幣形態とおわれた社会的労働—価値』(『文匯報』一九六三年三月二〇日)を参照。

三 商品形態そのものから生ずる

では、商品——価値の神秘性、超感性的性格とは何をさしているのだろうか。それはどこから生まれるのであろうか。マルクスは第四節の第三文節から第一〇文節にかけて、この問題に答えている。第三文節のはじめで、「では、労働生産物が商品形態をとるや否や生ずる労働生産物の謎的性格は、どこから生ずるか？ 明かに、この形態そのものからである」（一七二頁）とのべている。このきわめて教訓的な叙述を私はいくども読みかえずなかではじめてその意味を的確にとらえるようになった。というのは、まず、この第三文節は（この叙述のあと第四文節をふくめて）、ひるがえって商品形態が発生させる謎のような性質の内容を論述して、それがなぜまたどのようにして商品形態から生ずるのかを論じていないからであった。ついで、私が『資本論』第一章の前三節の主題と第四節の主題およびその論理的関係を十分理解していなかったからであった。ところで、私の現在の理解によって、まず「商品形態」という範疇が何を指しているのかについて見解をのべることにしたい。この問題は当面鍵と

なるものである。

宇宙の一切の事物がすべてそれにふさわしい存在形態をもっていることは、周知のとおりである。たとえば、労働生産物である亜麻布は亜麻布という形態をもち、机は机という形態をもっている。だが、形態によっては商品としての生産物と生産物一般とを区別することはできない。商品としての生産物が生産物一般と区別されるのは、それが独自の形態をとるからである。この独自の形態は商品そのものの上に表現されるのではなくて、それが他の生産物と交換される、つまりは金という貨幣商品と交換されるさいに現象し、交換価値、価格とよばれる。こうしたことは生産物一般にはみられない。商品生産者たちの社会では、交換の場にあらわれない生産物についても、それは金銭でもって表示されるのであって、うえにのべた交換価値、価格形態をもつ。しかし、これは想像的・観念的なものであり、その社会が商品生産者たちの社会となっているからである。商品が生産物一般と区別されるのは、それらに共通な生産物そのものの自然的形態によるのではなく、この交換価値または価格形態によるのである。このようにして、「商品形態」という範疇は生産物が商

品となるときにとる特殊な交換価値または価格形態を指しているのである。もちろん、商品といえども生産物一般がもつ自然的形態を同時にまたざるをえない。したがって、マルクスがさきの引用文中でのべている「商品形態」とは、商品の交換価値または価格形態、換言すれば、商品の価値形態を指しているのである。商品の価値そのものが何であるかにかかわらずなく（それが自然諸属性であろうと、人間労働であろうと、それにかかわらずなく）、一般に人びとは商品の交換価値または価格形態が商品のもつ価値の表現であり、その（価値の）形態であると、認識するのであるから、生産物が商品形態をとることも生産物がその価値の表現形態——つまり価値形態をとるということになる。

みぎのような理解の正しきは、『資本論』第一章第三節に叙述されたつぎの文章からも明らかにしうる。すなわち、「諸商品は、鉄・亜麻布・小麦のごとく、諸使用価値または諸商品体の形態で世界にあらわれる。これこそは、諸商品のありのままの自然的形態である。とはいえ、それらは、使用対象であると同時に価値の担い手であるという二重的なものであるが故にのみ、諸商品である。だから、それらは、それ

らが自然的形態および価値形態という二重形態を有つかぎりにおいてのみ、諸商品として現象するのであり、換言すれば、諸商品の形態をとるのである」（一三二―一三三頁、傍書は引用者）。このくたりによつてつぎのことが明白になる。すなわち、マルクスがいうところの商品に謎のような性質の「商品形態」を発生させるのは「二重形態」のなかの「価値形態」（最後的には貨幣で表示される価格形態）である。生産物が商品として現象するのは、マルクスがまさしく指摘するように、それらからありのままの自然的形態をとりさつたあとに、この「価値形態」がのこるからである。さらに『資本論』第一巻初版への序言のなかで、マルクスは資本主義経済の細胞形態が「労働生産物の商品形態または商品の価値形態である」（七〇頁）とのべているが、この叙述も生産物の「商品形態」がその「価値形態」にほかならないことを論理的にのべたものである。

四 商品の物神化とは何であるか

すでにのべたように、マルクスは第三文節において商品の物神的性格が商品形態そのものから生ずることを指摘したあ

と、ひきつづいてただちになぜここから生ずるのかを論述せず、商品の物神化の内容を論じ、人びとがどのような「物体」の前にひざまづくかを指摘している。後者について、今日、われわれの間には異なった見解が存在している。この問題はぜひとも明白しておくかねばならない。私は、マルクスがまず商品物神化の内容を論じたのは、第五文節以下で商品の物神化がどのようにして商品形態から生ずるのかを説明することを容易にするためであった、と理解している。では、私は順序にしたがってまずこの崇拜の対象（なんらかの物の概念（含意））についてのべることにしたい。マルクスの叙述にしたがえば、労働生産物が商品形態をとるときに形成される物神化の内容とはつぎのようなものである。すなわち、「人間の諸労働の同等性は、労働諸生産物の同等な価値対象性」といふ物象的形態を受けとり、人間的労働力の支出の、その時間的継続による度量は、労働諸生産物の価値の大きさと、いう形態を受けとり、最後に、生産者たちの諸労働の社会的諸規定がそこで実証される彼等の関係は、労働諸生産物の社会的関係という形態を受けとる。」（一七二頁、傍点は引用者。私が傍点を付したところがとりわけ重要である。このくんだり

について、今日、見解が相異しているが、私はつぎのように理解している。「商品生産者の交換関係（価値関係）において、その価値はもともと同等性をもつ人間労働であるが、人びとによって生産物そのものの同等な「社会的自然諸属性」とみなされている。これこそが「人間の諸労働の同等性は、労働諸生産物の同等な価値対象性」といふ物象的形態を受けとる」とされるものである。さらにいえば、「物象的形態」という語は価値というもの（対象）がありもしない自然諸属性とみなされることを表現している。したがって、時間ではかられる労働量も自然的物質の量とされてしまい、生産者たちの関係（労働によって相互に生産物を交換する関係をさす）も生産物そのものありもしない自然諸属性が生みだした関係として認識されてしまうのである。

私のこのような理解はマルクスの展開と合致しないのではないかという疑いをひきおこすかもしれないが、この疑問はマルクスの叙述をよみすんでいくならば解消するであろう。マルクスは第四文節においてこの点についてさらに明白に論じている。かれはつぎのようにのべている。すなわち、

「商品の神秘性なるものは、単につきの点にある、――

というのは、商品形態は、人間自身の労働の社会的諸性質を、労働諸生産物そのものの对象的諸性格として、これらの諸物の社会的な自然諸属性として・人間の眼に反映させ、したがってまた、総労働にたいする生産者たちの社会的関係を、彼等の外部に実存する諸対象の社会的な一関係として人間の眼に反映させるといふこと、これである。この交替によって、労働諸生産物は商品——感性的で超感性的または社会的な諸物——となるのである。たとえば、物が視神経に与える光の印象は、視神経そのものの主観的刺激として現われないで、眼の外部にある物の対象の形態として現われる。だが、視覚の場合には、外的対象たる一物の物から眼という他の物に、現実^ニに光が投ぜられる。それは、物理的な物と物との間の物理的な一関係である。これに反して商品形態は、また、それが自らをそこで表示する労働諸生産物の価値関係は、労働諸生産物の物理的本性、および、それから生ずる物的諸関係とは、絶対^ニに何の係わりもない。それは人々そのものの一定の社会的関係に他ならぬのであって、この関係がここでは、人々の眼には物と物との関係という、幻影的形態をとるのである。だから、類

例を見出すためには、吾々は宗教的世界の妄想境に逃避しなければならぬ。ここでは、人間の頭脳の諸生産物が、独自の生命を与えられた・相互にかつ人々と関係を結びあつた・自立的な諸姿態のように見える。商品世界では、人間の手の諸生産物がそうである。これを私は労働諸生産物が、諸商品として生産されるや否やそれらに纏いつくところの、したがってまた商品と不可分離であるところの、物神崇拜と名づける」(二七二―三頁、傍点は引用者)。

マルクスがあげた例に注目し、傍点を付したところに注目していただくと、つぎのことが明瞭になるであろう。すなわち、第三文節における「人間の諸労働の同等性は、労働諸生産物の同等な価値対象性という物象的形態を受けとる」という記述が、ここでは「人間自身の労働の社会的諸性格を、労働生産物そのものの对象的諸性格として・これらの諸物の社会的な自然諸属性として・人間の眼に反映させる」として記述されている。また、「生産者たちの諸関係は、労働諸生産物の社会的関係という形態を受けとる」という記述が、ここでは「総労働にたいする生産者たちの社会的関係を、彼等の外部に実存する諸対象の社会的な一関係として人間の眼に反

映させる」として記述されているのである。このように、いわゆる「物象的形態」が「生産物の社会的な自然諸属性」の形態をさすものであり、また、いわゆる「労働諸生産物の社会的関係という形態を受けとる」が、たとえば亜麻布と金それぞれに共通な(実際は幻想的な「社会的な自然諸属性」にもとづいて関係をもつという形態を受けとるということ)をさすものであることはまったく明らかである。商品生産者の眼には、交換される亜麻布と金はすでに亜麻布と金(使用価値)として映じないで、「価値」として映るのであるから、生産物の交換関係は「価値関係」である。しかしながら、この「価値」は、かれらにとっては、生産物に凝結した労働または労働関係ではなく、生産物そのものもつ「社会的な自然諸属性」である。この点こそが問題をとく鍵である。マルクスは「この交替によって、労働諸生産物は諸商品——感性的で超感性的または社会的な諸物——となるのである」とのべている。こうして、たとえば亜麻布と金の交換が表示したところの、もともと私的諸労働の社会的総労働に対する関係すなわち「人々そのものの一定の社会的関係」が、かれらの眼には、亜麻布と金の関係がそれらに共通の「社会的な

自然諸属性」または「社会的諸物」の相互間の関係へと変化するといった「物と物との関係という幻想的形態」をとって現象するのである。これは「生産関係の物象化」とよばれるが、かくて、市場価格の変動においてまるでこの社会的な諸物が人びとを豊かにしまた破産させる作用をはたし、人びとがそれに身をゆだねているようにみえる。この点について、マルクスはつぎのようにのべている。「価値の大いさは、交換者たちの意志・観念・および行為に係わりなく、たえず変動する。交換者たち自身の社会的運動が、彼等の眼には、諸物象——彼等によって制御されないで彼等を制御する諸物象——の運動という形態をとる」(二七六頁)。これは「物象の人格化」とよばれる。このような認識は、われわれにはきわめて奇妙で不合理に思えるが、商品生産者たちの社会では必然的な所産である。商品生産者たちの社会では、つぎに詳しくのべるとおり、生産者は独立の経営を営なむ私有者であるから、かれらの私的労働の社会的総労働に対する関係は、ただ盲目的な市場交換によってのみ実現されこそすれ、社会によって制御されない。そして、すべての交換が貨幣という「怪物」によって媒介されるようになってのち、人と人の

問のあの馭しがたい労働交換関係が霧におおわれついには神秘的な謎めいたものとなってしまふのである。それ故に、このような不合理な認識はこの社会的存在の必然的で合理的な反映なのである。それはマルクスによって商品の物神化とよばれ、資本物神化の端緒的な形態である。

以上によって、商品の物神化をつぎのように要約してよからう。人びとは価値の実体が労働であることを認識しえず、その実体を生産物の自然諸属性であると錯覚し、したがって、「労働諸生産物」をそのような自然諸属性をもった「社会的な諸物」であると錯覚する。こうして、その実体がたえず変動する市場価格の背後で人びとの運命を司さどる造物主であると考へ（とりわけ貨幣となる商品に集中する）、まるで原始社会で偶像を崇拜したのと同様に、この「諸物」の前にただひたすら拝跪するのである。商品の物神化とはどのような「諸物」への拝跪であるのか。この「諸物」という語の概念（含意）はきわめて重要であり、明確にされなければならぬにもかかわらず、今日、いくらかの経済学教程がマルクスの叙述を正しくとらえず、または明確にとらえていないことは、遺憾であるといわなければならない。

五 商品の物神化はどのようにして形成されるのか

ついで、マルクスが商品（価値）の物神化の根源と形成過程をどのように論述しているかを検討することにしよう。第五文節から第一〇文節までがこれにあてられている。第五文節では「商品世界のこの物神的性格は、……商品を生産する労働の独自の・社会的性格から生ずる」（二七三頁）と問題の所在が端的に指摘されている。ところで、多くの人はこの独自の・社会的性格を直接的な公的労働にまで拡大するが、私には、このような人びとが社会主義社会の若干の局部的な・一時的な現象に多少ともまどわされているからであると思える。同時に、商品、価値とは何かという問題についてもかれらなりの理解にたつて、公的所有者が交換する生産物をやはり「商品」とであると認識しているが、こうした把握はもはや拡大ではなくて、一切の包含でしかない。この問題はさておき、マルクスじしんが第六文節において、「商品を生産する労働の独自の・社会的性格」をどのように展開しているかをみることにしよう。

「諸使用対象が商品となるのは、総じて、それらが相互に独立して営まれる私的諸労働の生産物であるからに他ならない。これらの私的諸労働の複合体は社会的総労働を形成する。生産者たちは、彼等の労働諸生産物の交換によつて初めて社会的接触を結ぶのであるから、彼等の私的諸労働の独自の・社会的な諸性格もまた、この交換の内部において初めて現象する。あるいは私的諸労働は、交換が労働諸生産物をして——また労働諸生産物を媒介として生産者たちをして——入りこませる諸連関により、事実上はじめ、社会的諸労働の諸環たる実を示す。だから、生産者たちにとっては、彼等の私的諸労働の社会的諸連関はそのあるがままに現象する、——すなわち、彼等の諸労働そのものにおける人と人との直接的に社会的な諸関係としてではなく、むしろ、人と人との物象的諸関係および物象との社会的諸関係として、現象するのである」（一七三〜四頁、傍点は引用者）。

この叙述は、三つの点を明白にしている。(1)私的諸労働による生産物だけが商品となりうる。(2)商品を生産する諸労働は独立した経営を営なむ私的労働であるから、その社会的性

格は、——つまり社会的分業における部分労働としては、ただ間接的であるにすぎない。換言すれば、私的所有者相互間の自発的な、無組織的な交換をつうじてのみ、それらは社会的接触をなしはじめてその社会的性格があらわれる。(3)しかし、このような私的所有者相互間の盲目的な交換がひきだすものは、マルクスがのべているように、明白な・現実そのものの人びとの労働関係ではありえない。すなわち、「彼等の諸労働そのものにおける人と人との直接的に社会的な諸関係としてではなくて、むしろ、人と人との物象的諸関係および物象と物象との社会的諸関係として、現象するのである」。

第三点はさきの二点に比して難解であるが、問題の鍵はこの「物象」という語の理解にひそんでいる。とはいえ、みぎに引用した文章をよみ進むならば、この「物象」とは商品の使用価値（生産物）がなりとところの「価値物」、生産物の社会的自然諸属性を指していることが、明らかにになる。なぜならば、まさしく人びとは価値そのものをこのようにとらえはしても、その実体が労働であるとはとらえないからである。この点については四においてすでに詳細にのべたとおりである。

第六文節は商品（価値）物神化の根源を指摘しているが、なお、具体的説明には欠けるところがある。社会的接触（盲目的な交換）をつうじて現象したものがなぜそのような逆立ちしたものであり、生産物の中に凝結した労働を生産物の自然諸属性に変化させてしまうのであろうか。すでにのべたとおり、マルクスは第三文節の冒頭において、それが「商品形態そのものから生ずる」つまり商品が交換されるときにとる価値形態（最終的には貨幣形態）から生ずると論じただけで、その形成過程を具体的に説明することはなかった。もちろん、マルクスは第七文節から第一〇文節において具体的な論述をしているが、二つの点に分けて理解したい。

第一、第七文節ではつぎのようにのべられている。すなわち、「労働諸生産物は、それらの交換の内部で初めて、それらの感性的で相異なる使用対象性から分離された・社会的で同等な・価値対象性を受けるのである。有用物と価値物への労働生産物のこの分裂が実際的に実証されるのは、ただ、交換がすでに充分な拡がりと重要さとを獲得したとき、かくして、有用の諸物が交換のために生産され、したがって諸物の価値性格がすでにそれらの生産そのものに際して問題と

なるとき、だけである」（一七四頁、傍点は引用者）。数行あとでこうものべている。相異なる労働諸生産物が交換において同等たりうるのは（つまり同等な価値性格をもつ）、ただそれらが体現している相異なる労働が共同的・抽象的な人間の労働であることにのみよる——と。ひきつづいて、マルクスはのべている。だが、私的生産者たちの脳髓は、「相異なる種類の諸労働の同等性という社会的性格を、労働諸生産物というこれらの物質的に相異なる諸物の共通な価値性格という形態で、反映するのである」（一七四頁、傍点は引用者）。これらの叙述でもっとも難解なのは、「生産物の共通な価値性格という形態」とは何を意味するかである。とくに、私的生産者たちの脳髓の中の生産物の「価値物」、「価値対象性」、「価値性格」（すべて同一のものをさしている）が何をさしているかに、鍵がひそんでいる。初学者はこの叙述が、交換が十分に拡大したとき（そのときには必然的に貨幣が媒介となつている）、私的生産者たちの脳髓に、生産物に共通な価値物・価値性格として反映するだけではなく、この価値物・価値性格が同等な人間の労働として反映する、とのべていると、理解するかもしれない。だが、これは大きな誤りである。なぜ

ならば、商品貨幣経済の実態、および第七文節の叙述が、マルクスがこのくだりでのべているところの、交換が十分に拡大したあと私的生産者たちの脳髓に實際上反映している価値物または価値性格とは人間的労働として認識されるものではなく、生産物の「社会的自然諸属性」として認識されるものであると、明白にのべているからである。この点は四においてすでにマルクス自身の叙述によって証明された。したがって、「私的生産者たちの脳髓は、相異なる種類の諸労働の同等性という社会的性格を、労働生産物というこれらの物質的に相異なる諸物の共通な価値性格という形態で反映するのである」。つまり、かれらは相異なる生産物のなかに凝結した

同等な人間的労働を生産物に共通な(実際はありもしない)一つの自然諸属性として反映する。このさい、「私的生産者たちの脳髓」のなかの「価値性格」が「現象から本質をみちびきだしうる人びと」がとらえるところの「価値性格」ではないという点を明白におかねばならない。この二つははっきり区別されなければならない。前者の「価値性格」とはつまりは生産物の「社会的な自然諸属性」(いわゆる価値対象性の物象的形態)のことであり、後者の「価値性格」とは

「物象でおおわれた労働」のことであって、これこそが価値対象性の本来の内容である。

以上の問題をいっそう明白にするために、第八文節の叙述を引用しておこう。この叙述はきわめて精細なものである。すなわち、

「人々が彼等の労働諸生産物を諸価値として相互に連関させるのは、これらの物象が彼等にとって同等な種類の・人間的な・労働の単なる物象的外被として意義をもつからではない。その逆である。彼等は、彼等の相異なる種類の諸生産物を交換において諸価値として相互に等置することにより、彼等の相異なる諸労働を人間的労働として相互に等置する。彼等はそれを意識してはいないが、しかし彼等は、かく行なうのである。だから、価値なるものの額には、それが何であるかということは書かれていない。価値はむしろ、どの労働生産物をも一の社会的象形文字に転化する。のちに至って人々は、この象形文字をとこうとし、彼等自身の社会的産物——けだし、価値としての諸使用対象の規定は言語と同じように彼等の社会的産物である——の秘密を探ろうとする。労働諸生産物は、それらが価値であ

るかぎりでは、それらの生産に支出された人間的労働の単に物象的な諸表現である、という後代の科学的発見は、人類の発達史において時代を画するものではあるが、しかし決して、労働の社会的性格の对象的仮象をおい払いはいしない。商品生産というこの特殊の生産形態にのみ妥当することとが、すなわち、相互に独立する私的諸労働の独自の・社会的性格なるものは人間的労働としてのそれらの同等性なのであり、労働諸生産物の価値・性格という形態をとるといふことが、商品生産の諸関係の虜となった人々にとつては、右の発見の前後をとわず——あたかも、空気が科学的にその諸元素に分解されても物体形態としての空気形態はなお存続するというのと同じく——最終決定的に見えるのである」(一七四—一七五頁、傍点は引用者)。

このくだりについて、一九五九年に私は『商品と価値を論ず』(『経済研究』誌一九五九年第一期)という文章のなかで私見をのべたことがあるが、今かさねて指摘しておくことにする。この叙述は、さきの叙述をうけて、商品生産の諸関係の虜となった人びとが生産物を価値とみなすのは、かれらにとつてこれらが物象的外被でおおわれた人間的労働として反映

せず、また、価値が労働の特殊な現象である(かかる観点はマルクス主義者のものである)ことをしらないからである。これとはまったく逆に、かれらは交換において相異なる生産物が同等な価値(かれらが確認できるものはあの「社会的な自然諸属性」であつて、労働ではない)をもつとみなすのであるから、相異なる労働ははじめて人間的労働と等しくおかれることになる(もともとそうなのだ)と論述している。あとの点について、とくに二点に注目しなければならない。すなわち、(一)かれらにとつては、価値が他の物象であるということが理由となつて、労働がまた他の物であり、それらがひとしく人間的労働となるという結論がみちびきだされる点である。(二)とくにかれらは交換において盲目的にこのように行なうだけであつて、実際にはそのなかにあるものをしてはいないという点である。したがつて、マルクスは「彼等はそれを意識してはいないが、しかし彼等はかく行なうのである」とかき、さらに「価値は物象的外被のもとに隠された人と人との関係である」と注記している³⁾のである。この注記は、人びとが、「商品と貨幣」の交換において現象する同等な価値性指を生産物のならかの同等な自然的諸属性とみなし、そして、そ

れが社会的労働または私的労働の社会総労働に対する関係を隠しているということを要約的に述べたものである。⁽⁴⁾第八文節のなかで、マルクスは「労働諸生産物は、それらが価値であるかぎりでは、それらの生産に支出された人間の労働の単に物象的な諸表現である」とべているが、この叙述は、「価値が生産物のなかに凝結した(物象化した)労働」であるといっているのではなく、生産物を生産するために支出された(つまり生産物に凝結した)労働が他のなんらかのものとして表現されるのべているのである。その意味はさきにもた一七五頁の脚注(二七)の意味と同じであって、第三文節における「人間の諸労働の同等性は、労働諸生産物の同等な価値対象性という物象的形態を受けとる」という叙述と、字面を別にすれば、同じ内容である。この叙述は、商品の価値は本質的には人間的労働であるが、現象的には霧におおわれて生産物の「社会的自然諸属性」となってしまうと指摘しているのである。⁽⁵⁾さらに、第八文節における「相互に独立する私的諸労働の独自の・社会的性格なるものは人間的労働としてのそれらの同等性なのであり、労働諸生産物の価値性格という形態をとる」という叙述もまた、第四文節にみられた「人間自

身の労働の社会的諸性格を、……これら諸物の社会的な自然諸属性として、人間の眼に反映させる」という叙述と、表記上のちがいを別にすれば、同じ内容をもつものである。このようにして、私的生産者たちの脳髓にある「生産物の価値性格という形態」が「生産物の社会的な自然諸属性という形態」であることが明白になる。第七文節だけをとりだすのではなく、前後の叙述をふくめて詳細に検討すれば、私的生産者たちの脳髓が「相異なる種類の諸労働の同等性という社会的性格を、労働諸生産物というこれらの物質的に相異なる諸物の共通な価値性格という形態で反映する」という問題点について、みぎにみたような誤解が生じるはずはない。

第二、交換が十分に拡大したのち、人びとが生産物のもつ同等な「価値性格」、「価値物」を實際上認識しながら、他方で、この価値性格、価値物を生産物の自然諸属性と錯覚するのは、なぜであるのか。換言すれば、「生産物の商品形態または商品の価値形態」から商品(価値)の物神的性格が生ずるのは、なぜであるか。この点について、マルクスは第九文節から第一〇節においてさらに具体的に説明している。すなわち、「生産物交換者たちがさしあたり実践に関心をもち

のは、彼等が自分の諸生産物と引換えに他人の諸生産物をどれだけ受取るか。つまりどんな比率で諸生産物が交換されるかという問題である。かかる比率は、それらが一の慣習的な固定性にまで成熟した時には、労働諸生産物の本性から生ずるよう、見えるのであって、たとえば、一トンの鉄と二オンスの金とが同等な価値のものであるのは、あたかも、一封度の金と一封度の鉄とがそれらの物理学的および化学的諸属性の相異なるにも拘らず同等な重さであるのと同じように見える。」(二七六頁、傍点は引用者)。また第一〇文節ではつぎのよう

にもおべている。すなはち、「労働諸生産物に商品の刻印をおす・したがってまた商品流通の前提されている・諸形態

(交換価値、貨幣、価格等の経済形態をさしている——引用者)は、人々が、……それらの内実について説明しようとする前に、すでに社会的生活の自然的諸形態という固定性を

帯びている。かくして、価値の大きさの規定をもたらしたものは諸商品価格の分析に他ならなかったし、諸商品の価格性の確定をもたらしたのは諸商品の共同な貨幣表現に他ならなかった。だが、商品世界のこの出来あがった形態——貨幣形態——こそは、まさに、私的諸労働の社会的性格を、し

たがってまた私的労働者たちの社会的諸関係を明示する代りに、物象的に蔽いかくすものである。」(二七七頁、傍点は引用者)。マルクスのこの説明はきわめて精緻なものであって、われわれが注意深くこれをよむならば問題を解決できる。私は論文『貨幣形態とおおわれた社会的労働——価値』(文瀾報)一九六三年三月二〇日)において、すでにエンゲルスの二つの叙述にもとづきつつ商品の物神化がなぜ商品形態そのものから生ずるのかという問題について、一般的にまた詳細に論じているので、これ以上はのべないことにする。

以上によって、『資本論』第一章第四節の前半一〇節までの試論はおわるが、あらためてつぎの四点に要約しておく。

(一)商品の神秘性、超感性的性格および物神的性格とは、価値の神秘性、超感性的性格および物神的性格である。

(二)価値の神秘性、超感性的性格は、人びとが価値を労働の特殊な現象としてとらえ得ずに、生産物の「社会的自然諸属性」としてとらえ、またこの「諸物」がたえず変動する市場価格の背後で人びとの運命を左右しているとみなす、こうした逆立ちによってつくりだされるものである。商品の物神化

とは、要するに、人びとがこの「価値物」、「社会的自然諸属性」の前に盲目的に拝跪し、その制御をうけ翻弄されることである。

(三)商品の神秘性、超感性的性格は、価値の実体たる労働が抽象的労働であって人びとの眼に映じ手にふれえないものであることにもとづくのではない。同時に、資本主義制度のもとで、人びとが社会主義制度のもとでのように、感覚と思考とによって価値の実体たる労働を社会的に全面的に計量しえないという事情にもとづくのではない。資本主義社会において、人びとが価値を労働として認識しえず、ありもしない「社会的自然諸属性」として錯覚するのは、交換が貨幣を媒介とするほどにまで発展し、人びとが商品貨幣経済関係の諸現象の虜となっているために、もともととおおよそ認識されていた労働関係が根本から霧におおわれてしまうことに原因している。したがって、逆の面からいえば、資本主義制度のもとで、たとえ生産物の労働要費が全社会的に計量されるようになったにしても、人びとが商品貨幣経済関係の諸現象の虜となっている条件下で、そもそも社会的労働という視点から「価値物」を検討することは思いもおよばないのであるか

ら、価値が労働にはかならないという科学的認識をかれらに与えることはできないのである。

(四)商品の物神化は商品貨幣経済関係の必然的な反映である。科学的な労働価値学説は、この物神のおおいをはぎとり、商品の価値が私的諸労働の社会総労働に対する関係の特殊な表現であることを明白にし、価値量（したがって価格）がまったく偶然に無規則的に規定されるのではないことを明白にしたけれども、そうした物神的意識をもたらす客観的条件そのものをとりさることはできず、したがってまた、人びとの脳髓にしみこんだ物神的観念をとりさることもできなかった。人と人の間の労働交換関係そのものを貨幣形態によっておおよそ「物象」的関係へと逆立ちさせないためには、ただ革命によって私有制を廃除し公有制を樹立しなければならない。この点について、マルクスは第一章第四節でつぎのようになっている。すなわち、「価値の大きさの規定は、相対的な諸商品価値の現象的諸運動の背後に隠された一つの秘密である。この秘密の看破は、労働諸生産物の価値の大きさの単に偶然的な規定という仮象を止揚するが、しかし決して、かかる規定の物象的形態を止揚するものではない」（一七六―七頁）

と指摘し、また、「社会的生産過程すなわち物質的生産過程の姿態は、それが、自由に社会を構成する人々の産物として彼等の意識的な計画的統制のもとに立つばあいにはのみ、その神秘的な霞の衣をぬぎすてる」(一八三頁)と予言している。先覚者のこの予言は、今日、社会主義国家のなかで実現されている。これは守られねばならないし、いっそう強固にし発展させられねばならない。

(3) 『資本論』第一巻、第一分冊一七五頁の脚注を参照、

「ガリアニが『価値は二人の人物の間の一関係である』と言ったとき、彼は、物的外被のもとに隠された関係と、附言するべきであった。」。また、マルクス『経済学批判』困民文庫三三頁を参照。

(4) 一九五七年、『社会主義制度における商品価値の問題』のなかで、私はマルクスのこの注記を引用したが、残念なことに「物的な外被」によって隠された過程を十二分に理解するにはいたらなかった(科学出版社、一〇六頁)。一九五九年、『商品と価値を論ず』のなかでは、やや完璧な認識に接近することができた(『経済研究』誌、一九五九年第二期、六〇頁)。

(5) 古典的著作のなかで、「物化」、「物象化」という語は二つの意味で用いられている。その一つは、人間の経済的諸関係が逆立ちして(物化して)諸物そのものの自然諸属性となることを指して用いられる。その二つは、生きた労働が凝

結して諸物となる(物化する)ことを指して用いられる。この二つは区別されなければならない。

訳者あとがき

駱耕漠氏には、ここに翻訳紹介した論文の他に、『資本論』研究にかかわるものとしては、つぎのような論文がある。

「商品と価値を論ず」(『経済研究』誌、一九五九年第一〇期)

「商品と価値を論ず(続)」(右同、一九五九年第一期)

「『資本論』第一巻第一篇の主題と構成」(『文汇报』一九六三年三月一日)

三年三月一日)

「貨幣形態とおおわれた社会的労働——価値」(『文汇报』一九六三年三月二〇日)

一九六三年三月二〇日)

「価値法則と『価値決定』に関して」(『経済研究』誌、一九六四年第二期)

六四年第二期)

「『価値決定』の量の種々な規定性」(右同、一九六四年第四期)

「『虚偽の社会的価値』を如何に正しく理解するかの問題について」(右同、一九六四年第六期)

駱耕漠氏の二連の研究が中国国内でどれほどの地歩を占め、さらに国際的にどれほどの問題性をもつかを指摘すること

駱 耕漠 『資本論』第一章第四節の要点と疑問についての試論(松野)

一七九(四七五)

とは、私の力量にあまる問題である。中国における『資本論』研究のありようとその水準の一端を、この紹介論文によってうかがい知ることができればというのが、私の紹介意図である。ただ、賈耕漠氏の研究が中国における社会主義建設の発展段階を反映して広義経済学を体系づけその内容を豊富にしようとする課題設定とかたく関連していることは、当然のことながら明らかである。この点にふれる所作をあげればつぎのようである。

「社会主義商品生産の必要性和『衰退』過程を論ず」(『経済研究』誌 一九五六年第五期)

「社会主義商品生産の必要性和過渡期」(右同、一九五八年第五期)

「価値法則と国民経済の計画的なつりあいのとれた発展の法則の生産に対する作用およびその相互関係」(『理論戦線』一九五九年第五期)

「計画的(比例的)な発展法則に関する若干の研究」(『経済研究』誌 一九六一年第二期)

「社会主義制度における商品と価値」(科学出版社 一九五七年) また、中国の社会主義建設において提起された具体的な問題

題に関しては、つぎのようなものがある。

「重工業生産物の総売上げ高税の問題」(『経済研究』誌 一九五六年第三期)

「生産手段の低価格政策に関する問題——南水・索真同志に対する批判」(右同、一九五七年第三期)

「東聯社を論ず」(右同、一九五九年第一期)

「わが国人民公社の誕生と発展の根拠を論じ右派分子の誤謬を反駁する」(右同、一九五九年第九期)

「わが国が『労働に応ずる分配』制度を採用した経験に関する研究」(右同、一九六一年第四期)

「十月革命四十周年の偉大な成果と贈り物」(右同、一九五七年第四期)

「右派経済学者の政治陰謀を徹底的に粉砕しよう」(右同、一九五七年『経済学界反右派斗争專輯』)

「馬寅初のブルジョアの立場と浴流経済学の観点を評す」(右同、一九五八年第一〇期)

なお、訳出した論文の節と項編成は訳者によって改められ、「第三節 いくつかの見解に対する検討」は割愛された。訳文中の『資本論』引用頁は長谷部文雄訳青木文庫版のものである。